大分県の沈み橋について

日本文理大学　河野　忠

高知県の沈下橋に代表される潜水橋は，日本各地に存在している．その実態は高知県(1999)の調査で，全国で 410 ヶ所現存していることが明らかとなった．その第一位は高知県(69 ヶ所)，第二位が大分県(68)で，以下，徳島県(56)，宮崎県(42)と続いている．しかし，このデータは一級河川のみに限られており，その実態は未だ不明である．そこで大分県における沈み橋の実態を解明すべく，悉皆調査を実施した．その結果，大分県には四万十川や吉野川に架かるような大きな沈み橋こそ少ないものの，180 ヶ所(2003 年 6 月 6 日現在)現存していることが分かった．なかでも杵築市の八坂川には明治九年築造の永世橋という，日本最古といってよい沈み橋がある．これまでは，高知市にあった昭和 2 年築造の柳原橋が最古(現存する橋では四万十川の一斗俵橋，昭和 10 年)といわれていたが，50 年ほどその起源をさかのぼることがわかった．また，大分県院内町には三つ又橋という T 字型の沈み橋がある．恐らく世界でも唯一の珍しい沈み橋ではなかろうか．

この沈み橋という名称は，九州地方，特に大分県固有のものであり，高知県では沈下橋と呼ぶ．他の地域では潜り橋(東北～中部)，冠水橋(荒川流域)，潜水橋(中部～中国・四国)，潜没橋(京都府)，潜流橋(広島県)などの例がある．

大分県に沈み橋が多い理由としては，小藩分立に由来する財政難，および肥後石工の流れを汲む豊後石工の存在が考えられる．しかし，最も決定的な要因は地形，地質的条件である．大分県の沈み橋は，国東半島(22%)と大分県北部(26%)，南部(40%)に集中している．南部に沈み橋が多い理由は，9 万年前の阿蘇大噴火による火砕流堆積物(溶結凝灰岩)の存在といってよい．この溶結凝灰岩は竹田から臼杵，大分市にかけて堆積しており，広くて浅い谷底平野と平らな河床を形成している．北部は第三紀の古い地質であり，開析の進んだ谷が多い．従って，農地と河床との高低差が少なく，堤防も少ないことから，沈み橋を築造する条件が整っていたといえよう．

高知県四万十川流域振興室(1999)：流域沈下橋保存に係わる全国事例調査結果，高知県．